

修士論文（要旨）

2024年1月

大学生における感情欲求と抑うつ，主観的幸福感との関連  
—情動知能と親密性の役割の検討とともに—

指導 山口 一 教授

国際学術研究科  
国際学術専攻  
心理学実践研究学位プログラム 臨床心理分野  
222J2011  
廣井 世玲菜

Master's Thesis (Abstract)

January 2024

Relationship between Need for Affect, Depression, and Subjective Well-Being in Undergraduates: Along with Examinations of the role of Emotional Intelligence and Intimacy

Serena Hiroi

222J2011

Master of Arts Program in Clinical Psychology

Master's Program in International Studies

International Graduate School of Advanced Studies

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

## 目次

第1章 問題と目的.....	1
1.1 感情欲求.....	1
1.2 親密性.....	1
1.3 情動知能.....	1
1.4 主観的幸福感.....	3
1.5 抑うつ.....	3
1.6 青年期と精神疾患.....	4
1.7 目的.....	4
第2章 方法.....	4
2.1 対象者.....	4
2.2 調査方法.....	4
2.3 調査項目.....	5
2.4 倫理配慮.....	6
2.5 分析方法.....	6
第3章 予想される結果.....	7
第4章 結果.....	8
4.1 感情欲求尺度に対する確認的因子分析.....	8
4.2 基礎統計.....	9
4.3 抑うつ尺度, 正規性の検定.....	10
4.4 相関関係の検討 (男女別) .....	10
4.5 共分散構造分析.....	11
第5章 考察.....	15
5.1 感情欲求の因子構造.....	15
5.2 性差の分析.....	16
5.3 男女別の各尺度の相関.....	16
5.4 男女別の抑うつや主観的幸福感への各尺度の影響.....	17
5.5 総合考察.....	19
第6章 課題と考察.....	20
謝辞.....	21
引用文献.....	I
資料	
資料1 調査実施のお願い (教員向け) .....	-1-
資料2 調査実施のお願い (学生向け) .....	-4-

資料3	調査票.....	-6-
資料4	質問紙調査実施への承諾書.....	-14-

## 第1章 問題と目的

近年の精神疾患患者の増加傾向を背景に 2011 年に厚生労働省は「4 大疾病」に精神疾患を加えて「5 大疾病」へと変更し重点的取り組みを開始している。中でも患者数が一番多いのは感情障害である。抑うつは感情障害をはじめ、多くの精神疾患で見られる症状であり、自殺の原因となり得る（上野・池田，2010）。そのため抑うつに関する研究は今後更に重要になると考えられる。感情に関して、「感情欲求」という概念がある。この概念は「感情接近欲求」と「感情回避欲求」から構成されており、感情を誘発させる状況や活動を回避或いは接近を求める一般的な動機として定義されている（Makio&Esses, 2001）。中でも「感情回避欲求」はアレキシサイミアとの関連が示唆され精神的健康の不良さが指摘されている。ただ感情欲求という概念は日本においてほとんど研究されていない。抑うつを低減させる感情的側面のスキルとして情動知能がある。情動知能とは、情動を扱う個人の能力のことで自他の情動を正確に知覚・評価し表現する能力、思考促進のため情動に接近・活用する能力、情動制御能力から構成されるとされる（Mayer&Salovey, 1997）。この能力は対人関係の構築に役立ち、ストレス反応の低減に認知にも影響を与えるとされる。他者との親密関係は抑うつへの深刻化防止に有効な要因であり、大学生における不適応においては他者との親密性が大きく影響を与えているとの研究がある（竹淵，2016）。

日本において、精神疾患患者数の増加及びうつ病といった感情障害による社会的損失は大きい。また個人においても、思春期青年期といった人生の重要な時期に精神疾患罹患することで成長や発達に対する負の影響は計り知れない。よって、感情的側面と他の側面を検討することにより臨床的・社会的に利益となり得るような支援方略の広がりや新たな知見を得ることを目的とする。

## 第2章 方法

A大学に所属する大学生(18~25歳)男女300名程度を対象に質問紙調査を行った。倫理審査委員会の承認を受けたうえで実施し、A大学において講義を持つ教員に調査を依頼、承諾を得られた講義にて、学生に口頭説明を行い回答を求めた。質問紙項目として年齢、性別、学年の基本属性の他に(1)感情欲求(2)情動知能(3)親密性(4)主観的幸福感(5)抑うつを問う尺度を用いた。得られたデータは、統計的手法を用いて分析を行うこととした。まず、基礎統計量を算出し、感情欲求尺度に対して確認的因子分析を行った。次に、男女差を分析するため  $t$  検定、その後、Speamanの順位相関係数を算出し相関分析を行った。最後に、感情欲求 2 因子、情動知能 4 因子、親密性を独立変数に、抑うつ及び主観的幸福感を従属変数として共分散構造分析を行った。

## 第3章 結果

感情欲求は先行研究と同じく 2 因子構造となることが確認された。また、男女間において感情回避欲求、情動の認識・理解、情動の表現・命名、親密性において有意な差がみられた。男女共に親密性、主観的幸福感はほぼ全ての因子と有意な相関がみられた。共分散構造分析において、男女ともに感情回避欲求は抑うつに対して直接的に有意な正のパ

スを示すと同時に親密性を介して間接的にも影響を正の影響を与えていることが示された。女性のみにおいては、感情接近欲求が情動の表現・命名から有意な正のパスを受け、抑うつに対して直接的に有意な正のパスを示していた。

また、感情回避欲求は主観的幸福感に対して直接的にも間接的にも負の影響を与えていることが示された。情動の制御・調節も主観的幸福感に対して直接的に正の有意なパスを示しただけでなく、親密性を介して間接的にも正の影響を与えていることが示された。ただ、男性は情動の認識・理解が親密性に正のパスを示したが女性は示されなかった。

#### 第4章 総合考察

本研究は精神疾患に対する支援方略の新たな模索や精神疾患の予防に対する多角的視野の広がり貢献すると考え、大学生を対象に感情欲求が抑うつと主観的幸福感に与えている影響、および各概念間の関係性を検討することを目的とした。精神疾患に対する支援方略の新たな模索や精神疾患の予防に対する多角的視野の広がり貢献されることを目指した。

感情欲求はどちらも情動の表現・命名との関係が示された。このことから、感情に対する姿勢は自分の感情に名前を付け、適切に表現できることが重要な要因であると推察された。また、共分散構造分析の結果から感情回避欲求は抑うつを間接的・直接的に高め、主観的幸福感を間接的・直接的に低めることが明らかとなり、精神的に不健康な状態との関連が推察された。以上から、抑うつを低減し主観的幸福感を上げるには感情回避欲求を低める支援が有効な方法であると考えられる。

感情回避欲求によって精神的に悪影響が及ぼされる状態を緩衝させるものとして情動知能が働いている可能性が示唆された。情動知能の中でも情動の認識・理解は男性においては間接的に抑うつに有意な負の影響、主観的幸福感に有意な正の影響を及ぼしていた。その一方で女性においては情動の認識・理解が抑うつを高める可能性が示唆された。このことは新たな知見であるため、なぜ情動の認識・理解が抑うつを高める要因として働くのかを新たな研究テーマとして明らかにすることが望まれる。

## 引用文献

- Erikson, E.H. (1950). *Childhood and society*. New York: W.W. Norton & Company. (仁科 弥生(訳)1977, 1980). 幼児期と社会 1・2 みすず書房.
- 藤井 恭子(2021). 日本の大学生における主観的幸福感の規定要因 皇學館大学現代日本社会学部 日本学論叢 11, 106-116.
- 福原 俊一(2002). 臨床のための QOL 評価と疫学. 日本腰痛会誌, 8(1): 31-7.
- 福森 崇貴・小川 俊樹(2006). 青年期における不快情動の回避が友人関係に及ぼす影響—自己開示に伴う傷つきの予測を媒介要因として 日本パーソナリティ研究第 15(1), 13-19.
- Joseph. Ciarrochi & Joseph. P. Forgas (Eds.) John D. Mayer. (2005). (中里浩明・島井 哲志・大竹恵子・池見陽(訳)). エモーショナル・インテリジェンス 日常生活における情動知能の科学的研究 ナカニシヤ出版
- 神山 貴弥・藤原 武弘(2015). 日本語版感情欲求尺度開発に関する研究 関西学院大学社会学部紀要(120), 115-124.
- 加藤和生(1999). こころの知能 (EQ) とは: 情動知能の理論 教育と医学の会 7(3), 238-246
- 川久保 惇・小口 孝司 (2015). 余暇における他者との交流が主観的幸福感および抑うつに及ぼす影響 ストレス科学研究 30, 69-76
- Kessler, R. C., Berglund, P., Demler, O., Jin, R., Merikangas, K. R., & Walters, E. E. (2005). Lifetime prevalence and age-of-onset distributions of DSM-IV disorders in the National Comorbidity Survey Replication. *Archives of General Psychiatry* 62: 593-602.
- 小松 佐穂子・箱田 裕司(2011). 情動知能に関する研究の動向 九州大学心理学研究 12, 25-32.
- 厚生労働省(2015) e-ヘルスネット 精神疾患の早期発見・治療の重要性 Retrieved April 3, 2023 <https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/heart/k-08-002.html>
- 厚生労働省(2020). 精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築のための手引き: 患者調査.
- 厚生労働省(2020). 平成 30 年度版厚生労働白書 Retrieved July 20, 2023 <https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/heart/k-08-002.html>
- 松田 哲 (2015). コミュニケーションにおける性差についての考察—「車のエンジンがかからないの」を事例に— 流通経済大学スポーツ健康科学部紀要 8, 49-54
- Mayer, J. D. & Salovey, P. (1993). The intelligence of emotional intelligence. *Intelligence, Journal of Research in Personality*; 42, 755-762
- Makio, G. R., & Esses, V. M. (2001). The need for affect: Individual differences in the motivation to approach and avoid emotions. *Journal of Personality*, 69, 583-614
- 尾崎紀夫・笠井清登・加藤忠史・神庭重信・功刀浩・久保千春・小山司・白川治・西田淳志・野村総一郎・福田正人・元村直端・山脇成人 (2010). うつ病対策の総合的提言 日本生物学的精神医学会誌 21, (3)155-176

- 大林 由佳・伊藤 菜穂子・横田 正夫(2007).青年期における生きがい感と抑うつ・孤独感・幸福感との関連について 日本心理学会第71回大会
- 大平 秀樹(2005). 第3章:抑うつと情報処理 坂本 真士・丹野 義彦・大野 裕 (編) 抑うつ  
の臨床心理学 pp51-73 東京大学出版会
- 坂本 真士・大野 裕(2005).第一章:抑うつとは 坂本真士・丹野義彦・大野裕 (編) , 抑  
うつ  
の臨床心理学 pp7-28 東京大学出版会
- 島 悟・鹿野 達男・北村 俊則・浅井 晶弘(1985).新しい抑うつ性自己評価尺度について精  
神医学 27(6),717-723
- 島井 哲志・大竹 恵子・宇津木 成介・池見 陽・Sonja Lynbomirsky(2004).日本語版主観  
的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale: SHS) の信頼性と妥当性の検討 日  
本公衆衛生誌 51(10),845-853
- 四万 陽裕・杉山 恵理子・森本 浩志 (2018) .不快情動回避心性と想起特性,および抑うつ  
の関連 日本認知・行動療法学会第44回大会 p 374-375
- 佐々木 司(2016). 学校保健ポータルサイト. 第4回「精神保健・精神疾患を学ぶ」, 日  
本 学 校 保 健 会 Retrieved January06,2024 <https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/heart/k-08-002.html>
- 杉山 崇 (2002).臨床心理学研究における抑うつの定義と研究モデルについて. 学習院大  
学人文科学論集, 11,187-204.
- 杉山 崇・坂本 真士(2002). 大学生女子の経験する友人ライフイベントと被受容感, 被拒  
絶感の関連:抑うつへの臨床的対応に向けて 日本健康心理学会第15回大会発表論文  
集.
- 杉山 崇・坂本 真士(2006). 抑うつと対人関係要因の研究: 被受容感・被拒絶感尺度の作  
成と抑うつの自己過程の検討 健康心理学研究. 19(2),1-10
- 竹淵 香織(2016).大学生における人間関係の希薄化: 対人不安を抱える学生と学生相談室  
で扱われる「相手のいない対人関係相談」の増加から 聖学院大学総合研究所紀  
要.62,156-167.
- Taksic,V.(2002).The importance of emotional intelligence(competence) in positive  
psychology. Paper presented at The first International positive psychology  
summit, Washington, D. C., October 4-6
- 谷 冬彦・原田 新(2011).新たな親密性尺度の作成 神戸大学大学院人間発達環境学研究科  
研究紀要,5(1):1-7.
- 豊田 弘司・森田 泰介・金敷 大之・清水 益治 (2005) .日本版 ESCQ(Emotional Skills  
& Competence Questionnaire)の開発 奈良教育大学紀要.人文社会科学.54,(1),43-  
47.
- 豊田 浩司・照田 恵理(2013).大学生におけるストレスラー、ストレス反応及び情動知能の  
関係 奈良教育大学紀要 62(1),41-48.
- 上野 武治・池田 官司(2010) .第10章感情障害について 奈良 勲・鎌倉矩子・上野武治  
(編)標準理学療法学作業療法学専門基礎分野—精神医学— 医学書院 149-163
- 内田 由紀子・遠藤 由美・柴内 康文(2012).人間関係のスタイルと幸福感: 付き合いの数  
と質からの検討 実験社会心理学研究.52(1),63-75.



宇佐美 尋子 (2014) .ストレスプロセスにおける主観的幸福感の機能—主観的幸福感と反応型及び事前対応型ストレス対処との関連— 聖徳大学研究紀要 聖徳大学 25,聖徳大学短期大学部 47,15-20.

山田 裕章・峰 松修・冷川 昭子(1996).正常者と精神障害者の「いきいき度」の比較——「いきいき調査表」ver.1の改訂—— 健康心理学研究 9(1),21-33